

鎮守の森

稲宮 健一

畑祥雄「奇跡の森 EXPO70」写真展のお知らせが届いていた。一九七〇年大阪万博の跡地に自然豊かな人工森ができていて、生物多様性をほうふつとされる森とのこと。一九六四年入社して、配属が伊丹だったので、しばらく大阪市内の繁華街の小さな部屋を借りて住んでいたが、大阪府住宅公社の抽選に当たり、千里ニュータウンに住み替えた。その頃、地下鉄は千里中央駅まで通じてなく、そこから北のあたりは次に開発が予定される掘り返しされた、赤い土砂がむき出になっっている荒地地だった。この近くの万博の跡地にSDGsの聖地と言える森ができていたとのことであった。あの頃は土地と見れば、坪なんぼと言う土地神話の真つただ中、大阪市郊外の人が住めるところを自然林に帰すなどと想像もできなかった。少し世の中が落ち着いきたのか、懐かしく思い、今度の万博の時に一度訪ねてみたい。

鎮守の森と言えば、宮脇昭（元横浜国立大学教授）を思い出す。宮脇が旭硝子財団主催の「ブループラネット賞」を受賞した時の記念講演で、彼独自の植林の主張を述べた。その説は本来の日本の森は常緑広葉樹を主とする森であったが、この様な森林は今や一%にも満たないほどしか残ってない。殆どが人の手が入った二次林や、人工的に単一種類の画一樹林が多い。これが台風や、地震、洪水などの時に地滑りなどの崩落を起こし、多くの災害の原因になる。スギ、カラマツ、ヒノキなどの針葉樹は人が造林したもので、人が常に継続して手入れ維持管理が欠かせない。これに対して宮脇は「混植・密植型植林」を提唱している。本来の植生はタブノキ、シイ、照葉樹が本来の姿だ。このような植生の森なら、火事や地震などの自然災害もの耐えられる力を持っている。現在、横浜国大のキャンパスの入口の両脇にこの方式の植林がされている。宮脇は多種類の樹種の苗を土と共に混ぜて、ポットに入れて、造成地に播き自然植林を蘇らせると言っていた。